

今から六十四年前、私の父の妹としてさっちゃんは生まれました。私にとって、一度も会うことのできなかった叔母です。さっちゃんは幼い頃から利発で、家族の中心となる明るい存在でした。すくすくと元気に成長したさっちゃんは、小学校でもたくさんのお友達に囲まれて毎日楽しく過ごしていました。そんなさっちゃんが、この南山女子部を目指し始めたのは小学校四年生頃のことでした。勉強も運動もとても大好きだったさっちゃんは、体育の授業で跳び箱をとんだ時に膝に強い痛みを感じました。小学六年生の十月のことでした。痛みは次の日も、その次の日もひかず、日に日に増して夜も眠れないほどになっていきました。いくつかの病院へ行っても原因がわからず、さっちゃんの両親は当時名古屋でいちばん大きかった名大病院へさっちゃんを連れて行きました。そこでさっちゃんは、骨肉腫という骨の癌だと診断されてしまいました。しかもできるだけ早く癌のある方の脚を切断しなければ命の危険があることを宣告されてしまいました。

想像してみてください。ついこの間まで元気にお友達と校庭で遊びまわり、身の回りのことは自分で何でもできて、日常生活を普通に送っていた毎日が、ある日を境に突然脚を失うかもしれないという選択を迫られる状況です。みなさんだったらどうしますか？

さっちゃんは骨肉腫のある方の脚を切断することを決めました。なぜなら、さっちゃんには夢があったからです。目標があったからです。この南山女子部に入学するという希望を持っていたからです。

その後すぐに入院して、年が明けた一月に大手術を受けました。当時では最高の設備と医師のみなさんにお世話になることができましたが、今とは技術も機械も薬剤も比べ物になりません。さっちゃんは傷口の激しい痛み毎日耐えながらも、病院のベッドで入学試験に備えて勉強を欠かさなかったそうです。当時高校生だった私の父は、毎日学校帰りにさっちゃんに会いに行っていたそうです。片脚だけになってしまった大好きな妹を慰めようと病室のドアを開けますが、顔を見ると辛くて辛くていつも何も言えずにいました。そんな父にもさっちゃんは、明るく接していたといいます。

突然の病魔に苦しみ、大手術を受け日々激しい痛みと闘っていたとは思えない、とても穏やかな表情のさっちゃんの写真を見るたび、どんな気持ちでカメラを見つめていたのかと私は今までに何百回と想像してきましたが、未だにさっちゃんの気持ちには近づくことができません。

それから間もなく、南山女子部の入試の日がやってきました。骨肉腫と診断されてからたった四ヶ月後のことです。松葉杖をついて学校に向かいました。学校のご厚意で、衛生室という今の保健室で受験させていただきました。さて結果はどうだったのでしょうか。。さっちゃんは見事合格しました。その時は家族みんなが久しぶりに笑顔いっぱい、楽しい時間だったそうです。

しかしながら、さっちゃんは一日も授業を受けることなく亡くなってしまいます。その年の八月六日のことでした。亡くなった時のことは、未だに私の父にも、さっちゃんの母にあたる私の祖母にも聞けずにいます。

時は流れ、私の長男が南山男子部に入学することとなった時、祖母と父が一冊のアルバムを出してきてくれました。それがこの赤いアルバムです。深い悲しみで五十年以上ずっと開かれることのなかったまるで新品のようなアルバムを開くと、私も初めて見るさっちゃんの写真がたくさん貼ってありました。ページをめくっていくと、このアルバムがさっちゃんの死後に当時の南山女子部の担任の先生が作ってくださったものだと分かりました。一日も授業を受けられなかったさっちゃんを、亡くなってからもクラスメイトとしてしっかりとみなさんと一緒に過ごさせてくださっていた様子が涙が溢れました。さっちゃんの写真をどこに行くにも連れて行ってくださっていました。とても心地よいあたたかさが胸にじわっと伝わると同時に、このあたたかさはどこかで感じたことがあると思いました。それは南山教会で行われた長男の合格感謝式での、ダシオン校長先生のお話で感じたあたたかさでした。それはつまり、五十年近く経っても変わらない南山のあたたかさです。ずっとずっと、心を大切に教育を守ってこられたことに、私は心から感激しました。父や祖母から、あの時のお礼をお伝えしてこのアルバムをお見せして欲しいと頼まれ、私はダシオン先生を訪ねました。先生は突然のことにも関わらず、副校長先生方とこのお話を共有してくださり、是非さっちゃんのことを女子部のみなさんに伝えてほしいとおっしゃってくださいました。そしてこの度、このような形でお話させていただいております。

中高生のみなさんは、思春期だとか多感な時期だと形容されます。私自身もその頃にはお友達との関係に悩んだり、頑張っても頑張っても成績が上がらなかったり、なりたい自分になれずにもやもやしたり、時には全てが嫌になって投げ出したくなったりということを経験しました。何度も、もう限界だ、これ以上は無理だと思う場面もありましたが、そんな時はいつもこう考えました。さっちゃんだったらどうするだろうか、と。さっちゃんは、今私が悩んでいることを悩むことすらできずに死んでしまったのではないか。そう思った時、その悩み苦しみのものがとても贅沢で恵まれていることではないかと気付いたのです。そしてそこからまた諦めず粘り強く頑張ることができました。

「あなたが虚しく過ごした今日は 昨日死んでいった誰かがあれほど生きたいと願った明日」というある小説の中の一節があります。みなさんが今この南山で過ごしているこの瞬間も、さっちゃんにとっては願っても願っても叶うことのなかった貴重な時間なのです。時には学校への足が重く、気持ちの暗いまま乗るバスや地下鉄の中での時間も、やる気がなかなか起こらない授業中の時間も、さっちゃんからすれば全て奇跡の時間なのです。

さっちゃんは亡くなる一ヶ月前に南山の宗教担当のワグナー神父様より洗礼を受けました。実はさっちゃんの両親は、入学式の少し前にはもうさっちゃんの余命があまり長くないことを医師から告げられていました。しかし南山に通うことを信じて希望を強く持っていたさっちゃんにそのことを言うことができず、制服やカバンなどの一式を揃えて家族みんな毎日祈っていたそうです。南山の先生方や教会の方々には、その後も足繁く病室にお見舞いいただきました。一日も通うことはできませんでしたが、さっちゃんも南山のあたたかい校風や教育方針に触れることができたと思います。学校生活、ひいてはこれからの人生において、みなさんには大きな壁や高い波が目の前に立ちはだかることがあります。そんな時、必死に生きて命の灯を最期の瞬間まで燃やし続けたさっちゃんのことを思い出してください。そして、道に咲く花や心地よい風、お友達とふと見上げた時に見える広い空、日常の何気ない幸せを感じた時にもどうかさっちゃんのことを思い出してください。

みなさんは一人一人が特別な存在です。そしてそのままでとても素晴らしいのです。どうかご自分を大切になさって、それぞれの目標や夢に向かって努力を惜しまず、この南山での日々を充実させてください。もちろん、今まだ目標や夢がなくても大丈夫です。毎日を誠実に過ごしていれば、必ず夢は見つかります。そんなみなさんをきっとさっちゃんは優しく見守ってくれると思います。

最後となりましたが、このような機会を与えてくださいましたダシオン校長先生をはじめ、当時の南山学園の関係者すべての方に、父と祖母に代わりまして心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。そして生徒のみなさん、本日はさっちゃんのことを知ってくださってありがとうございました。どうぞ南山生の誇りを胸に、素敵な学生生活をお過ごしください。